第4回 忘れられない看護エピソード
優秀賞
一般部門

窓

【関森（せきもり） 小都歌（ことか）・京都府】

「集中治療室」。それはテレビがなく、周りは大半が壁で景色も見えず、今日の天気は晴れなのか曇りなのか分からない場所。しかし、この場所こそが私の生活の場であった。

私は今から6年前、病に倒れた。集中治療室での入院生活が長期にわたり、私は景色が見えない、何もない集中治療室での生活にストレスを感じていた。しかし、自分で立つことも歩くこともできなかった私にとって「外の景色を見る、外に出て散歩をする」など不可能なことだった。

集中治療室には一つだけ窓があった。その窓は、スタッフステーションから私の様子を見ることができるように作られた窓であり、私がその窓から見えるのはいつも医師や看護師などが忙しく働いている景色だった。「空が見たい」と思う私にとってこの窓は窓ではなかった。

ある日、1人の看護師が私の所へ来て「空はどんな色が好き？」と言った。私は「青くて雲一つない空が好き」と答えた。次の日、私がいつも通り起床すると、窓からは医師や看護師の忙しい姿が見えず、空があった。「青くて雲一つない空」が見えた。

あの看護師は青くて雲一つない空の写真を窓に貼ってくれたのである。たくさんの空の写真をあの窓に貼って私に景色を見せてくれた。感動で涙が止まらなかった。

私は今、病気を克服し看護師を目指している。そして、今もあの看護師を忘れることはない。外見はとても身長が低く小柄だったが、いつもワックスできっちりと固めたお団子ヘアが特徴的で、小柄でありながらも背中は誰よりも大きく見えた。

あの看護師は私の命を救ってくれたわけでもない。しかし、私の心に手を差し伸べてくれたのである。私もあの看護師のように真っすぐに患者に手を差し伸べられる看護師になりたい。「青くて雲一つない空」のように真っすぐな看護師に…。